
ONE PIECEを食い尽くせ！！

三鳴雷

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ONE PIECEを食い尽くせ!!

【Nコード】

N4378S

【作者名】

三鳴雷

【あらすじ】

神に間違つて殺された少年は『トリコ』の世界に行くことを願った。だがまたもや神のミス（ワザと？）により『ONE PIECE E』の世界に送られてしまった。少年の願ったグルメ細胞と、神が与えた悪魔の実が組み合わさったとき禁断のチート生物が誕生してしまった。ただ旨い物を求めている少年は原作すら食い散らかす（予定）……息抜きで書いてみました。たぶん超不定期更新になりそうな予感。

1・間違つて異世界

青い海、青い空、白い雲・・・そして騒がしい海賊達。

さて、何で俺はこんな所にいるのやら？

事の起こりはよく二次創作なんかである神に間違つて殺されるといふもの。そしてお詫びに神の前に呼び出された。

まあ当然憤慨したが好きな世界に特典付きで送ってくれるというのが、家族には悪いが我慢した。実際自分の葬式を見れば諦めも付くしな。

で、俺の希望した世界と特典は、『トリコ』の世界に『グルメ界で生存できる程度の実力（グルメ細胞）』だ。

俺は食べるのが好きだ。胃袋の上限が無いのなら永遠に旨い物を食べ続けていたいと思うほどに。

その点『トリコ』の世界なら地球では味わえないほどの美味に出会えるのは間違いない。

それにグルメ界に行ける程度の実力があれば人間界の食材達に後れを取ることは無いだろう。

人間界の食材を食い尽くしたらグルメ界に脚を伸ばすのも良いかもしれないが、人間界の物だけで数十年はかかるだろう。ならばそこまで無理をしなくても良いだろう。

グルメ細胞についてだが、交渉の結果なんと『四天王』の技もサーブスで着いてきた。無論成長によって威力に差が出るらしいが。

最初期ではフォーク・ナイフ、毒耐性、サニーゾーン（3m）、音

弾がいいところしいが十分だ。

と、そこまで決めて送って貰ったのだが、何かおかしかった。

？ まず目覚めたとき何故か小舟に乗っていた。まあそれは良いだろう。

十五歳なのにメタボなボディだったが、マッスルボディに激変していたしな。

？ 近くに港らしい物が見えたので船にあったオールで進んでいくと、港にドクロのマークの付いた木造船が泊まっていた。

？ 火の手の上がる街。人々の悲鳴。血溜まりに臥す人間。金目の物を持った武装した男。

？ 上陸したと勝手に数名に囲まれて、剣や銃（かなり古い型）で威嚇される。今此処

さーて、俺はこの状況によく似た世界を一つ知っているぞ。

ジャンプ読むときは必ず読んでいたからな。トリコが連載される前だったら迷わずあの世界に送って欲しいと答えただろう。

何せ俺のような食いしん坊にとっては、あの世界の食材もまた一度は口にしてみたい物なのだから。

「おいこら！！テメエ聞いてんのか！！？」

おつといけない。現実逃避が長すぎた。一応武器を向けられているんだつたな。

「すまん、すまん。で、何だつて？」

「バカにしてんのかテメエ！？金目のもん出せつつつてんだよ！！！」

金目のもんねえ。この世界に来たばかりじゃ金なんて持ってないぞ。

あ、そうだ。

「なあ、この世界の通貨って何？」

「はあ？何言ってるんだ。ベリーに決まってるだろうが!!」

はい決定。どう考えても『ONE PIECE』です。本当に（ry
って、あの神俺を間違ってるだけじゃなく、送る世界まで間違えやがった!!

「（ギリッ）フザケンなあ~~~~~!!」

怒りにまかせて咆哮したら何故か海賊達が泡拭いて倒れ込んだ。霸王色の覇気？いやどっちかって言つと『サウンドバズーカ』？音弾が精々って言うてなかったか？

「やりやがったな!!ぶっ殺せ!!」

部下がやられたのが頭にきたのか、船長らしき男の号令の元数十名の海賊達が向かってくる。正直不可抗力で勘弁して欲しいんだが。

・・・まあ良い。実戦訓練だと割り切ろう。こいつらがどの程度の賞金首なのかは知らんが、どの程度体が動くか調べるのには丁度良いだろう。

神様に注文した体のスペックならばそうそう後れを取ることもないだろうし、やばいと思ったら逃げれば良い。

「フオーク!!」

先頭の子賊の胴体めがけてトリコの技を放つ。狙い通り体の中心に突き刺さったが、思ったよりも鋭く、貫通したようだ。背中から血しぶきが噴き上がっているのが見えた。

予想よりも威力があり思わず殺つてしまつたが、正当防衛だ。後で人を殺したことを悩むかもしれないが今はそれどころじゃない。

「ナイフ!!」

左右から迫る刀持ちの子賊二人に手刀を叩き付ける。片方はそのまま袈裟懸けに、もう一人は刀で受けたが、へし折れて唐竹割に。何発か銃弾も撃ち込まれたが、十分に避けられる速度だった。試しに腕で防いでみたけど筋肉で止まつたよ。

その後は一発撃つただけでかなり疲れるナイフやフォークを極力使わず子賊達を捻り潰していく。

思ったよりもコイツら弱い。いや、今の体のスペックが半端無いだけか。それに大方コイツら百万ベリー台かそれ以下の連中だろう。余りに脆すぎる。

「さて、残るはあんただけだがどうする？」

見える範囲にいるのは船長らしき男のみ。俺の無双を見たせいか引きつった笑みを浮かべている。

「へ、へへ、やるじゃねえか。アンタ名前なんて言うんだ？」

「工藤与一だ」

「ヨイチ？聞かねえ名だな。まあいい。どうだ、アンタ俺達の仲間にならねえか？もちろん俺が部下で構わねえ。ほら、今ならこんだけお宝も着いてくるぜ」

村から略奪したであろう金品を見せて俺を勧誘する船長。小物だなあ。俺も元の世界じゃ小物の代表選手みたいなもんだったからな。どことなく親近感を感じてしまうよ。

「悪いが俺はアンタの仲間になれねえ。だがまあ俺は別に賞金稼ぎってわけじゃ無いんだ。アンタが海賊を廃業するって言うのなら見逃してやっても良いが？」

俺みたいな臆病者には海賊なんて似合わないし、かといって正義の味方である海軍って感じでもない。

金はあるに越したことはないが、賞金首相手に怨み買うのも何だ。そんなわけでこれが最低限の譲歩。まあそれでも海賊を続けるのなら、その時は皆殺しにされる覚悟くらいはあるだろう。

「わ、わかった。海賊は辞める。だから……」

「ああ、行くが良い」

海賊船への道を空けてやる。船長はビクビクしながらも俺の横を通り過ぎ、愚かなことに後ろから斬りつけてきた。

馬鹿な奴だ。せっかく仏心出して見逃してやろうと思ったのに。

「髪^{ヘア}ロック」

髪より伸びた触覚が船長を絡め取る。オリジナルよりも短い3メートルという長さだが、相手は手の届く距離にいるのだ。十分すぎる。

「くっ、何で体が動かねえ!？」

「企業秘密だよ。さて、俺の慈悲を無駄にしまったねえ」

「けっ、殺すなら殺し屋がね!こちとら海賊、死なんぞ恐れねえ!

！」

よくぞ吼えた。ならこの後どうなるかと俺の知ったことではないな。ん？俺は何もしないよ。俺は、ね。

「そこまで言うのなら・・・村人達聞こえるか！！海賊達は動けないぞ！！恨みを晴らしたいなら武器を持って来るが良い！！」

俺の言葉を聞いて船長が青ざめた。自分たちがこの村の人たちに『何』をしたのか思い出しているだろう。

俺にはこの海賊達に怨みも憎しみも抱いてはいない。ならばコイツらに制裁を降すべきは、俺でも神でも海軍でもなく、彼等であるべきだ。

最初に現れたのは動かなくなった幼子を抱いた女性。次は涙を流す子供。杖を突いた老人。傷ついた青年 e t c

皆が目には憎悪を込め、地に臥した海賊達を見下ろしている。

そして何が合図になったのかは知らないが、皆が一斉に惨劇を開始した。

『ONE PIECE』の世界つてルフィ達が眩いから輝いて見えるが、大半の海賊はもろ犯罪者だからな。

殺人、強盗、人身売買何でもござれ。クロコダイルに至っては国家転覆のテロリスト・・・って、そーいやるフィも世界政府に喧嘩売ったんだっつたな。

危険度では『トリコ』も大概だが、こっちは平和の二文字が殆ど無いからな。

油断したら軽く死ぬる。人間の敵はやっぱ人間か。

ああ、旨い物を食って平和に生きたい。無理な相談だろっけど。

1・間違つて異世界（後書き）

どうも三鳴雷です。ごめんなさい浮気しちゃいました。

体が絶不調の時に電波が飛んできたので書き始めたら、思ったよりスラスラ書けたから投稿しちゃいました。

やはりジャンプ作品同士は相性が良い。ジャンプでもコラボしていただきましたね。

で、こつから先は私事ですが、あれですね、体調不良は風邪だろうとタカをくくつてはいけませんね。

私の仕事は不規則なので休みの金土二日ほどだるいと思いつつも普通に過ごしてたら、日月の出勤中死にそうになりました。

幸い今日も休みだったんですが昨日よりは体調が良い。でもちよつとだるい。どうしようか迷いながらも一応受診。

結果、全く別の病気でしたよ。自己診断は結構当てになりませんね。皆様も体には重々おきおつけを。

2・悪魔の実を頂きました

村人達によるリンチが終わった後、村長の家に招かれた。

船長も八つ裂きにされそうだったが、懐も寂しいし、海軍で換金と言う物をやってみたかったので一応止めた。

村人達に命があつて人相さえ判別できる程度で勘弁してやってくれと言つて医者に渡したら、船長には泣いて感謝された。今頃俺と同じく村人達による歓待を受けているだろう。

まあ、海賊に襲撃されたばかりなので村中通夜状態だが、お礼と言うことで村長から色々と振る舞われた。

家庭的な料理ばかりだったが、流石この世界は魚介が旨い。それなりに遠慮したが随分な量を食べた。

そしてそのまま村長宅に一泊させてもらえることになった。文無し of 俺にとって非常にありがたかった。

ちなみにこの村がある島はイーストブルーだそうだ。正直ホツとした。

緊張が少し緩んだので思いの外よく眠れた。

翌日目が覚めると枕元に掌大の宝箱が置かれていた。

当然寝る前にはこんな物無かったし、念のためにサニーゾーン、いや、俺用だからヨイチゾーンか、を張っておいたから気付くはずなんだが。

開けるかどうか迷ったが、開けてみることにした。宝箱に入っていたのは二つ。手紙と果実。

「どう見たって悪魔の実だよなこれ？」

果物の方はとても見覚えのある模様のあるイチジクのような形をしていた。

「……イチジクって実のように見えるけど、あれって花なんだが。気にしたら負けか？」

「さて、もう一個の手紙の方は、と」

封をされた便せんを破って中身を取り出すとこんな事が書いてあった。

『おはよう、神だ。君には重ね重ね迷惑を掛ける。ついすっかり送るべき世界を間違えてしまった。別にこっちの方が面白そうだから考えていないぞ。まあそれはともかく、お詫びと言っては何だが追加加点だ。君とこの上なく相性の良い悪魔の実を同封させて貰った。ただしこの実は君にとって非常に強力ではあるが危険な物でもあるので、食べるかどうかは君が決めてくれ。B Y . 神』

危険な実ねえ。でも非常に強力でもあるのか……。うーん、迷うところだ。別にこれを食べなくても、縁があればまた別の実と出会う可能性もあるわけだし。

実を前にしてしばし唸っていたが、覚悟を決めて膝を叩いた。

「よし、喰おう！！悪魔の実の味ってのにも興味があるし、一応神が強力とお墨付き入れてんだ」

あの神のことだから間違った実を送りつけてきた可能性もあるが、その時はその時だ。

それにこの実で自分の行く末を占ってみるのも良いかもしれない。戦闘に使える能力ならグランドラインにいずれは入る。使えなかつ

たらグランドライン以外の海を回りまくる。
そう決めて悪魔の皮をむく。やはりイチジクの皮のようにすんなりと剥けた。

「さて、それではいただきます！！・・・（モグモグ）・・・マズ
ウアツー！！」

俺の生涯の中でワースト3に入る不味さだ。思わずはき出しそうになるが意地で飲み込んだ。

あ、何かグルメ細胞のレベルが下がった気がする・・・

「ともかくこれで俺も能力者か。さて、あの実に宿る悪魔は一体何
だろうかね？」

服を着て村長宅を出る。村長曰くもう昼だそうだ。初めての实战で
予想以上に疲れてたかな？
昼飯を準備しておいてくれるというのでお願いしておく。うん、お
礼にあの船長の賞金から幾ばくか返そう。幾らになるかわからんが
な。

それはともかく屋外に出たのには訳がある。理由はごくごく単純に
能力を使ってみようと言うもの。

何の実かわからないのに屋内で発動させたら大惨事になりかねない
からな。

超人系ならそれほど問題にならんと思うが、動物系なら物によって

は建物が倒壊する。CP9のカクが床ぶち抜いてたしな。
自然系ならもつとやばい。無いとは思うがメラメラやらゴロゴロな
ロギア
んてのが当たったら村長宅が無くなる。

「ここらで良いか」

色々村人達の世話を焼きながらぶらつき、村近くの空き地に着いた俺は早速能力を発動させようとした。

とはいえ発動のやり方なんて知らないから、念じてみたり、腕が伸びたり飛んだりするようイメージしてみたりと色々アプローチしてみたが、ウンともスンとも言わねえ。

一時間ほどあれやこれや頑張ってみたが結局何も起きなかった。

どうやら不良品を掴まされらしい。おのれ神、そこまで俺のことが嫌いか。

ひよつとしたらヨミヨミの実のように特定の発動条件があるのかも知れないが、手紙に発動条件書いてなかっただけで十分嫌がらせだ。

「はあ、腹減ったから戻ろう」

何かもういいや。幸いにも俺にはグルメ細胞がある。こつちを鍛えていけば能力者相手でも引けは取るまい。

ともかくこれでグランドラインに行くことはまず無くなったから、そこそこ程度に強くなって平穩に生きよう。

「村長さーん。戻りましたよー」

「おお、お帰りなされヨイチ殿。さ、食事が出来ています」

「すいませんね。食事代は海賊を換金したら返しますから」

「いやいや、あなたはこの村を救ってくださった。ならば礼を尽くすのは当たり前です」

しばらく返す、返さないでもめたが最後は村長が折れてくれた。奥さんに料理が冷めると怒られたからかもしれないが。

ま、これで心おきなく食事が出来る。タダ飯ぐらいって称号は願いたいからね。

にしても随分豪勢な食卓だな。

「昨夜は海賊に襲われた直後と言うこともあり大した持て成しも出来ませんでしたから、昼食は妻がよりを掛けたそうですぞ」

「村の者達からもお礼の品が届きましたから、どうぞお食べください」

俺にとっては昨夜のメニューで十分ご馳走だったんだけどな。村人達の心遣いがありがてえ。

残すのは失礼と思い次々皿を空けていく。この鳥の丸焼きは鴨か？見たことがない魚を丸ごと使った蒸し物も旨い。おお、憧れのマンガ肉！！ビーフかこれ？タコも旨い、カニも旨い！！少し癖があるこの肉は山羊かな？これは食べたことがない味だけど・・・海蛇ですか、そうですか。

「ゲフツ、堪能しました。ご馳走様でした」

「はい、お粗末様。ふふ、残るかと思っただけど凄いわね」

「出された物は残さず食べると躰けられてきましたから」

この世界に来る前じゃ絶対に食べきれなかったよな。ま、バトルマングのキャラは物理法則を超えて食べるからこの位普通なのかもしれないがね。

おかげで悪魔の実で下がった細胞レベルも元に戻ったみたいだな。

「ところで村長さん。海軍の巡視船はいつ来るんで？」

「ああ、海軍なら明日には着くらしい。そこであの憎き海賊を引き

渡すことになっておる」

そっか明日か。うーんこのままこの村に厄介になるのもあれだから俺も同乗させてもらえないだろうか？

ま、それは明日聞けばいいか。出来なかつたら商船にでも同乗させてもらおうぞ。

「それじゃお腹ごなしに運動してきます」

「うむ、気を付けてな」

「あなた、与一さんに失礼ですよ」

「はは、万が一と言うこともありますから。あ、この新聞今日のですか？借りてつても良いですか？」

「構わんよ。ワシも妻も読んだからの」

お言葉に甘えて新聞を片手に先程の空き地を目指す。新聞を借りたのは今の世界情勢くらい言っておいた方が良さかと思つたからだ。

そついや地球にいた頃は新聞って言えばテレビ欄くらいしか見なかつたな。

そんな事を考えながら一面に目を落とす。これも特典だろうか、日本語でもないのにすらすと読めた。

一面に書かれていたのは『海賊王処刑日は一月後!!』

「……………は？海賊王？待て待て待て、これ本当に今日の新聞だよな!？」

近くにいた村人に詰め寄つて確認すると間違いないとのこと。

あー、まさか原作の時代より二十年以上まえかああ……………大海賊時代直前とか笑えねえ。ルフィ達が冒険に出たとき以上に海が荒れる時じゃないか。

おそらく世界の三大勢力が整っている20年後よりも遙かに混沌とした海になる。

何より俺が嫌なのは、原作時点で最上位に位置する連中とそこら辺の海で遭遇する可能性があることだ。少なくともロジャーが処刑される日には、ローグタウンに後の有名どころが集まっただけだ。

脂汗が流れ、新聞を持つ手に自然と力が入る。そこでふと気付いた。手の形がおかしい。人の手であったはずが、いつの間にかゴツゴツとした鉄へと変貌していた。

驚いて新聞を落とすと自身の下半身も変貌を遂げていることに気がついた。白と黒のモノトーン。どう見ても牛だった。

「なんじゃこりゃああああああっ!!!!!!」

全速力で村の中を駆け抜け抜け近くの池に辿り着く。慌てて姿を確認すると様々な生き物が混ざり合った化け物がいた。

頭から胸にかけては山羊、腹から下は牛、両腕は甲殻で覆われたカニのそれ。背中からは鴨らしき翼が広がり、その下の方からタコの脚が垂れ下がっている。よく見れば首筋にはエラらしき物が見え、尻の辺りからは蛇の頭が生えていた。

そこまで見てから今の自分を構成するパーツに見覚えがあることに気付いた。

ああ、ついさつき見たばかりなのに忘れる物かよ。これらは全部さつき食べた昼食の食材だ!!

その時のぞき込んでいた池の水面が揺れ、光る文字が映し出された。

『正解!!君が食べたのは動物系・幻獣種・モデル「キメラ」^{ソオン}。グルメ細胞と同じく生物を取り込むほどに強くなる特性があるから、食べ過ぎないように注意してね!!PS・グルメ細胞のせいで食べ

た物は記録され続けるから変な物は食べないように。BY・神』

………何故だろう。破格とも言えるような能力だが何か納得がいかない。

おそらくこの『キメラ』、元々はバクバクの実動物版みたいな能力だったのだろう。

でもこの体のベースは『トリコ』の世界の物。向こうでは個々人の食の記録が脳に蓄積され、そこからグルメリドとか言うのが作られていたはず。

つまるところ、この体は食べた物は忘れない。つまりは何度でも変身が可能、と。

俺は何処の生物兵器だ？別の雑誌で読んだ漫画で似たようなのがいたな。様々な生物のDNA取り込んで進化して核にも耐えられるって奴が。

そこまでは行かなくても、この体、チート過ぎるだろう………

2・悪魔の実を頂きました（後書き）

1・からの続きですが、私は今食事制限中です。

前々から太りすぎだったのは気になっていたんですけど、この間血液検査で肝臓の数値がやばいことに。

本格的にやばくなる前に自主的に摂生しようと思った矢先に病氣しちゃいました。

体が痩せることに抗議しているのだろうかと思っしまいましたよ。

まあそれはともかく、この『ONE PIECE』を食い尽くせ！』ですが、はつきり言ってしまうえば「お話の中でぐらい好きなので食べても良いじゃないか！」ってことが始まりだったり。

素直にトリコの世界に送るのも良かったんですが、あの世界だと食材とかほぼ創作になりそうなので駄文書きの私には無理です。

そこで諦めれば良かったんですが、ふっと妄想の領域で悪魔の実と結びついてしまった。先週号のコラボの印象が残ってたんでしょね。

3・夢は大きく

「しかし、よりもよって海賊王の処刑とはな」

ワンピースを語る上で絶対に外せないあのシーンに立ち会えるのかでもなあ、あそこって超一級の危険地帯だしな。うーむ、行くべきか行かぬべきか。

「ま、いいや。どうせ一回死んでんだ。やりたいことを好きなようにやろう」

今生は言わばおまけの人生だし、この世界では俺は天涯孤独の身。何処でのたれ死んでも誰も困らん。

そう思うと色々と吹っ切れた。どうせこの世界は原作のパラレルワールドみたいな物だろうから、どんな無茶やったって構わんだろう。

「でもまあやることは決まってるんだがな」

そもそも旨い物を食べるために異世界に来たんだ。それを忘れてはいけない。

悪魔の実を食べたときに決めたように、戦闘に役に立つゾオン系だからグラウンドラインには入る。

であるならば、まずはルフィ達が旨いと言ったこの世界特有の食べ物にコンプしておきたいところ。

そして地球ではすでに絶滅した生物、リトルガーデンの恐竜たちも食べておかないと。出来るならばついでに島食いも食べてみたい。

空島の空魚も捨てがたい。海王類も姿形でどれだけ味が違うのか非常に興味がある。

ウソップが激太りしたボーイン列島の食材達とはいかなる物か。

「そして最終目標は、東西南北全ての海の魚が泳いでおり、あらゆる海の食材が揃うと言われる幻の海。『オールブルー』」

このワンピースの世界に存在する魚は兆か京か垓か。とにかく途方もない種類の数の魚が生息しているのは間違いない。

くく、一生掛けても全種類食べられるかどうか。想像するだけでもヨダレが出る。

そうなるとより旨く食する為に腕の良い料理人も確保しておかなければ。

オールブルーが見つかったら海上レストラン「バラティエ」は拉致決定だな。

何とも夢と胃袋が広がる話しじゃないか！！

「その為にもまずは強くならなければね」

さて、そうと決まればまずはメシだ！！

明けて翌日、港に海軍の船がやってきた。グランドライン編で良く出てきた軍艦タイプとは違い、サニー号よりやや大きい程度の船だった。

乗員も背中に正義を刺繍した人間は一人だけ、後は制服と帽子の人が20名ほどと随分と少ない。

俺が捕らえた海賊が二百万ベリーと小物だったのも理由かも知れないが、海賊王の処刑で人手が足りないのが最大の理由だと思う。

ま、そんな事はどうでもいいか。ともかくこれで金が手に入った。まずはこれを元手にまずは情報と食材を集めよう。とはいえ村長夫妻に世話になりっぱなしなのも気が引けたので、半分の百万ベリーを渡した。そんなに受け取れないと言われたので、復興資金の援助として押しつけた。異世界最初の地として思い入れもあつたしな。

軍船への乗船は渋られたので、しょうがないから自力で飛んでいくことにした。

こんな事もあるのかと昨日のうちに空を飛ぶ練習はしておいた。嘘です、ホントは空を自由に飛んでみたかったです。

手に入れた金で地図やらコンパスは買ったので、うっかり迷子になることもないだろう。

イーストブルーの動物・魚類・植物の辞典、各種グルメ雑誌も購入することが出来たから行きたい場所も粗方決まった。

「では行くつか」

全身を完全に鴨に変え、大空へと羽ばたく。

こんな感じで俺の旅は始まった。ある日はジャングルの中で猛獣と戦い、ある日は高級レストランで舌鼓を打つ。

金が無くなれば空から海賊船を見つけて急襲。手に入れた金で時には非合法的な取引すら行って新たな食材を求めた。

生きるために食べ、グルメ細胞のために喰らい、悪魔の実のために貪った。

そんな毎日を過ごしていたら、たった二週間で名の知れた賞金稼ぎとして二つ名を与えられていた。

曰く、『悪食』。『悪食ヨイチ』それが俺の通り名となった。

ちなみに名前の由来は、一つに悪党を喰らい尽くすように殲滅するからだと言う。何種類もの肉食獣を取り込んだ結果、戦っているときに近寄ったら諸共喰い殺されそうだと海兵からも言われた。

俺は一度も人間を噛み殺した事なんて無いんだけどなあ。一応『四天王』の技を主軸にして戦っているのだから。

最初の村を出てから捕らえた賞金首は5名。内一人が一千万台の首だったのが有名になった原因だろう。

二つめは俺の食に対する執念からしい。高級レストラン梯子して、一日で一千万ベリ―使い切った事もあったから、少々反省するところがあったかも知れない。

ただ、一応これでもグルメを自称しているのだから、はなはだ不本意な通り名ではある。

今日も今日とて空に行く。一度客船で船旅もやってみたのだが、移動時間が長すぎて途中で飛び出してしまった。

加えて船旅って食事に制限が付くことを失念していたよ。積み込める荷に限りがあるから、おかわりもロクに出来なかったからな。

まあ途中海王類の襲撃にあって、そいつを思う存分食べられたから船代は無駄にならずに済んだが。

「ん？砲声か？」

風に任せてゆつたりと空を飛んでいると、彼方から砲声が聞こえた。ゼブラの地獄耳ほどではないが、俺の耳もそれなりに高性能だからな。

さて、どうしようか。大砲ぶつ放すような状況と言えば、海賊が船を襲っているか、海軍が海賊を襲っているか、もしくは海獣が船を襲っているか、だ。

幸い懐はそれなりに温かいから無視しても良いんだが、商船とかだつたら珍しい食材を乗せているかも知れないから一応見に行くとするか。

「チェンジ、モデル『ファルコン』」

鴨から隼^{ハヤブサ}へと姿を変え、空中で一気に加速する。

ハヤブサはペルのだろつとかは突っ込んではいけない。既に原作で出てきたゾン系のモデルは殆ど捕食済みだからしょうがない。

砲声のする方へと矢のように飛んでいくと、二隻の船が見えた。前方にるのは客船みたいだな。しかも中々に高級な部類に入る船と見た。

後方から大砲で威嚇射撃しながら追いつがるのは間違いなく海賊船だな。帆にドクロが入っているからわかりやすい。

「ふむ、客船か……。今大体三時くらいだからおやつには丁度良いか」

狙いを客船の方へ絞り、上空から急降下。帆の辺りで急制動をかけたから人型へと戻り、両足から着地する。

空から人が降ってくるとは思ってもいなかった船員達が騒ぎ、中には銃口をこつちに向けてくるような奴までいた。

「まあ落ち着け。俺は賞金稼ぎだ」

本当はグルメハンターって名乗りたいが、この場合賞金稼ぎの方が

船員達も落ち着くだろう。

俺の言葉で武器を下ろす船員達。しかしその後何人も船員達が俺に詰め寄り、喧々囂々話し始める。

余りにもうるさいのでボイスバズーカで蹴散らしたくなったが我慢。まずは落ち着かせようと口を開こうとしたが、船長らしき人が船員達を怒鳴りつけて道を空けさせた。

「申し訳ありません。うちのクルー達が失礼なことを」

「いや、気にせんよ。それより今どんな状況なわけ？」

「はあ、お恥ずかしながら差が船は海賊船の襲撃に遭っております。我が船はそれなりに名の知れた客船ですので何度も襲われております。ですが当然何の対策も施していないわけではありません。当船には屈強な用心棒が何名も常駐しています。ただ此度の相手は流石に彼等の手にも余りそうなのです」

「なるほど、今回襲ってきている相手はどなた？」

「『鬼熊のマクベ』1300万ベリー。残虐で知られた海賊です。話しによれば降伏した船すら船員を皆殺しにして撃沈したと言われています。何より恐ろしいのはあの男は悪魔の実の能力者だということですよ」

ふーん、狂人タイプの船長、しかも能力者か。まだ能力者とは戦ったこと無いんだよな。

手配書持つてるかな？えーと、あったあった。うわ、悪人面。

「なあ悪魔の実とは言うが、どんな能力か聞いたこと無いか？」

「本当かどうかわかりませんが、奴は巨大な獣に姿を変えたそうです」

十中八九ゾン系だな。しかも通り名からしてモデルは熊系の何かだろう。

海軍が手配書にその通り名を書いたのなら、的外れの物では無いだろう。

通り名は外見的特徴（麦わら、白ひげ等）からや能力的特徴（火拳、不死鳥等）から付けられることが多いらしい。

もちろんそれ以外もあるらしいが、コイツは明らかに後者から付けられた通り名だろう。

「あなたがどうしてこの船に現れたのかわかりませんが、どうか私たちにご助力ください賞金稼ぎ殿。助かった暁には重々お礼はさせていただきますので」

「ん、別に良いぞ。礼ならメシを頼みたいが良いか？」

「おお、ありがたい。助かったなら最高の料理で酒宴を開かせていただきますしよう」

「交渉成立だな。それじゃ潰してくるわ」

「え？」

言うやいなや両腕を翼に変え宙へと舞い上がる。

共同戦線？足手まといが増えるだけだっつーの。それに賞金の上前はねられるのも面白くないから邪魔しないでくれ。

足の速い船を使っているのか、海賊船は客船のすぐ近くまで来ていた。砲撃を止め、乗り込むためのロープを準備している海賊達が見える。

砲撃を止めているのは金目の物が吹っ飛ぶのを嫌ってかな。手慣れた感じがするなあ。

制動をかけず船首部分に着地する。まさか向こうから乗り込んでくるとは思っていなかったらしく、海賊達は咄嗟に反応できていないようだった。

ふむ、大体クルーは50人くらいか。まあまああの規模の海賊団だな。質としては今までにあつたどの海賊団よりも良さそうだ。

僅かに時間が空いたが、すぐさま海賊達が数人斬りかかってくる。銃を使わないのは自分たちの船を傷つけないためだろうか？それでも最低援護射撃ぐらいはした方が良くと思っただけだな。

俺の間合いに入ってきた順番に殴り飛ばす。お前らはお呼びじゃない。船長出せ船長。

「お前ら下がれ!!」

十人ほど放物線を描いた辺りで怒声が響く。とたんに大人しくなる海賊達。中々に統率は取れているようだ。

海賊達の中から出てきたのは手配書にある顔。コイツが『鬼熊』か。

「俺の船に乗り込んでくるたあ、随分勇気があるじゃねえか。名前を聞いておこうか用心棒!!」

「ヨイチという。あとあの船の用心棒は臨時だから、どちらかという賞金稼ぎと呼んで貰いたいね」

「ヨイチだと!! テメエ『悪食』か!？」

結構その通り名広まっているのか？俺は一度も自分から名乗ったこと無いんだけどな。不思議だ。

「テメエが悪魔の实の能力者とは聞いてなかったがまあ良い。所詮鳥じゃ俺は倒せねえ！なんせ俺様は『クマ』だからな!!」

元々大柄だった鬼熊の体が更に膨張し、全身を黒い体毛が覆ってい

く。首元に白い三日月状の模様があるからツキノワグマかな？

しかし、盛大に誤解してくれちゃってるな。俺は一言もトリトリの実の能力者だなんて言っていないんだが。

ま、誤解するのも無理もないか。俺もこんな実が存在するとは思ってなかったからな。

ふむ、せっかくのゾオン系同士、どうせなら俺も戦闘型の変身をして戦ってみるか。そうすれば誤解も解けるだろう。

「じゃあ俺も能力を使わせて貰うとするか。行くぞ、モデル『ゾツド』」

メキメキと音を立てて体に変貌を始める。

下半身は牛、上半身は猫化の猛獣に変化し、頭からは巨大な二本角が伸び、背中にはコウモリの羽根が生える。体毛の色は漆黒。そしてそのサイズは獣化した鬼熊より二回りは大きい。

二種類以上のモデルを混ぜる混合変身は元となった物があつた方がイメージがしやすい。今回はベルセルクから不死の御大にご足労願った。

「な、何だそれは？テメエ鳥の能力者じゃ無かったのか！？」

「俺は一言もそんな事を言った覚えはないが？それよりも無駄話はそろそろ終わりにしよう。俺は少々腹が減ったんでな」

ニイツと笑ってやれば海賊達から悲鳴が上がる。中には海に飛び込む奴までいる始末。

ひよっとして俺に食われると思ったとか？食人趣味は無いんだけどな……

「舐めるなあ！！たかが俺よりでかいだけで勝てると思ったたら大間違いだ！！」

言ってることは正論だが、残念ながらこのモデルはただでかくなっただけではなくパワーも跳ね上がっている。

鬼熊が突進してくるのを警戒していたが、何の変哲もないパンチのようだ。

せっかくのゾオン系同士だというのに、使い手が残念で正直がっかりだ。ゾオン系は戦闘技術で差が出てしまっからしょうがないか。

「もういい寝とけ。デーモンフオーク」

デーモンと付いてはいるが実際は普通のフオークと変わらない。獣爪のせいで更に鋭くなり、豪腕で破壊力が上がり、ただ単に巨大になっただけだ。

死なれると海軍に引き渡すまでの保管が面倒なので急所こそ外したが、丸太のような指がいくつも突き刺さったからそれだけで決着がついた。

「ま、おやつ代にはこの程度の働きが妥当かな。あーそうだ、一応聞いておくが他に俺とやりたいって奴はいるか？」

注意こそ向けていたが、ほぼ眼中になかった海賊達のことを思い出し、戦闘を続けるかどうか訪ねた。

無論全員が顔を青くして首を振っていたが。

「そうか、なら大人しくしておけ。余計な真似をしたら・・・」

口角を上げて牙を見せてやる。ただそれだけで顔色が青を通り越して紙のように白くなった。

ま、これでこれ以上俺の手を煩わせるようなことはしないだろう。

「しかしこれで1300万ベリか。ぼろい商売だこと」

3・夢は大きく(後書き)

どうも三鳴雷です。

投稿のためにログインしてみれば、お気に入り件数98!!
投稿して僅かな間に此処まで伸びているとはビックリです。
登録してくれた皆様ありがとうございます。

仕事が不規則なので更新も不規則になりがちだとは思いますが、これからも読み続けていただけたらありがたいです。

それはそうと主人公の能力ですが余りに強力にしすぎたかも。
既に並のゾン系じゃまず太刀打ち出来ない存在になってしまった。
現時点でもマルコあたりとなら五分にやれそうだ。
自分で書いててグランドラインの生物取り込んだ先どんな変貌を遂げるのか予測が付かない。

チートと言うよりもはやバグキャラ化しつつあるな。

4・悪夢のローグタウン

巨大な軍艦の横を通り港へとはいる。

ここはローグタウン。俺がこの世界にやってきて一ヶ月、遂に今日この場所で『海賊王』『ゴールド・ロジャー』が処刑される。

「にしてもとんだお祭り騒ぎだな」

これから一人が死ぬというのに、街は盛大に賑わっていた。

それほどまでに『海賊王』と言う称号は世の人々に恐れられているのだらう。彼が処刑されると言うことでこの世が少しでも平和になると言うことで皆浮かれているのだらう。

そしてこの賑わいの理由の一つに今日一日このローグタウンが戦闘禁止地域に指定された事もあるのだらう。海賊、海軍、賞金稼ぎ、その他全ての人間が戦闘行為を行ってはいけないと世界政府からのお達しだ。

もしそれが破られれば、この島に集う海軍元帥並びに3大将、以下将軍達による即時殲滅が待っている。おそらく政府は直接海賊達に海賊王の処刑を見せつけることで、海賊達の心を折るのが目的なんだらう。ま、俺はそのもくろみがもの見事に外されるのを知っているが。

その為十数メートルに一人の割合で海軍の正義マントが目につくほど威戒態勢敷かれていますので、町の住人達も結構な数が残っている。これもまた海軍の威信を見せつけるためのアピールなんだらう。

「注文良いかー？」

「はい」

「メニューのこっから此処まで全部よろしく」

「えっ!?!ここから此処までですか?」

「そう。あ、金は心配しなくても良いよ。この通りたんまりとあるからさ」

「かつ、かしこまりました!」

かく言う俺は町の住人達が避難していないことを良いことに、食堂でお食事中。ガイドマップに乗っているほどのかなりの大型店だ。海賊相手に暴れまくったせいか手元には一千万ベリーがある。地球に住んでいた頃にはまず手にすることが無かったであろう程の札束だが、今の俺のにとってはたやすく稼げる額になってしまっている。

「キシシシ、随分と豪勢じゃあねえか」

「あ?」

店員に見せた札束を見てか、店内に何者かの声が響く。

笑い声に非常に聞き覚えがあるので嫌な予感がしつつも振り返ると青白い顔をした巨漢が酒を煽っていた。

原作よりも遙かにスマートだが間違いない。よりもよって記念すべき原作キヤラー人目がコイツかよ……

「ゲツコー・モリア……」

おそらく四皇のカイドウとやり合ったときに死んだであろう部下達と共に店の一角を占拠していた。

あー、海軍が警備しているからって気を抜きすぎたか。よもやブラツと入った店にコイツがいるとは。

「キシシシ、良く俺の名を知っていたな。『悪食』」

「それはお互い様だろう。普通なら別の海の賞金稼ぎの名など知るはずは無いだろうに」

「ふん、イーストブルーに入ってからこつち teme の名前は良く聞くからな」

お遊びのつもりだろうがプレッシャーをかけてくるモリア。俺の實力を計るつもりなんだろうが、俺は付き合っつもりは無いから全て受け流す。

無視したのが悪かったのか、調子に乗って徐々に圧力を高めてくるので店内の空気が加速度的に悪くなっていく。

その為俺とモリアの間にいる客達を中心にどんどん逃げ出していく。店員達も逃げ出したいんだろうけど、悪いが彼等に逃げられると食事が出来ないのもそれは俺が許してはいない。

このままでは埒が開かないと思ったのかモリアが片手を上げる。おそらく能力を使ってなにがしかちよつかいをかけてくるつもりなのだろう。

流石にそこまでされては俺も黙ってはいられないので防戦体勢をとる。

「そこまでにしておけ」

緊張がピークに達する直前、横合いから声がかかった。

水を差されたのが面白くないのかモリアが睨み付けるが声の主は何処吹く風だった。

俺は勇気があるなと思いつながらその声の主を見、なるほど彼ならばこの状況で声を掛けてこれるだろうと納得した。

視線の先では身の丈ほどの長刀を背負った『鷹の目』のミホークが優雅にワイングラスを傾けていた。ちなみに長刀と言ってもまだこの時点では黒刀『夜』では無いようだ。

「邪魔すんじゃないよ『鷹の目』」

「お前こそ政府の命令を忘れたか？今此処で暴れば海軍が黙つてはいまい」

「キシキシシ、海軍が怖くて海賊なんぞやれんだろぅが」

邪魔をされたのが気に入らないのか、モリアの興味が俺からミホークの方へ移る。

とはいえこの時点でミホークは剣士として名声を得ているので、モリアもそれほど無理にちょっかいをかけてまで手の内を探る気はないようだが。

やれやれ全く、こつこつ連中が集まるのは知っていたがよもや同じ場所で飯を食うことになるとは思っても見なかった。

「フフフフフ、なんだやらねえのか？」

・・・また聞き覚えのある笑い声。せっかく場が落ち着いてきたのにロクでもないのが。

戦いの気配に誘われたのか、店の扉を開いて新たな一団がやって来た。

「ドンキホーテ・ドフラミンゴか。この店にはこれ以上荒事屋はいらないんだがね」

「フフフフフ、つれねえ事言つなよ悪食」

俺の言葉を無視し、あげく席が余っているにもかかわらず俺と同じテーブルに着くドフラ。何でわざわざここに来るかな？いつそモリアの方へ行って殺し合いでも始めてるよ。

モリアより尚青白くなった顔をした店員が料理の第一弾を運んできたついでに、ドフラはちゃっかりと自分の注文をする。どうやらこの席からしばらく動くつもりはないようだ。

「フフ、しかし来てみるもんだな。こんな所で今話題の賞金稼ぎに会えるとはな」

「そう言うお前からこそわざわざイーストブルーまでご苦労なことだ。やはり狙いはあれか？」

「当たり前だろ。俺を含め、この島に集う海賊達は全員それが目当てさ。だろっお前ら？」

ドフラの言葉に頷くのはモリア。しかしミホークの方は頷かずただグラスを傾けるのみ。

「あん？お前は興味ないのか鷹の目？」

「俺が目指すのは剣の高みだ。“それ”自体にはさほど興味はない。今ある興味はロジャーという男を通して見る世界の広さだ」

「フフ、スカした野郎だ。お前はどうか悪食？賞金稼ぎでもアレは魅力的か？」

うん？俺か？そうさな……

「別に食えるもんじゃ無さそうだから大して興味はないな。食いもんだったら誰にも譲るつもりはないが」

「フフ、悪食らしい答えだ。ちなみに聞いておくがお前の目標は何だ？」

「オールブルー」

「ああ、なるほど」

何だ文句あつか？奪い合うようなもんでもないし良いだろうが。

しかしよりにちもよって後の七武海の内3人が揃うとは、一体此処は何処の地獄だ？

今の時点で3人も相当に強い。一対一なら勝敗は五分五分と言ったところか。正直店内に賞金稼ぎ一人では肩身が狭い。

戦闘禁止令様々だ。全く世界政府に感謝する日が来るとは思わなかった。

「まあいい、此処であったのも何かの縁。どうせ明日から海で会ったら殺し合うんだ。せつかくだから乾杯といかねえか？」

ドフラが酒瓶を掲げて提案する。確かにお互い海賊同士、俺に至っては賞金稼ぎだ。海で出会ったら間違いなく戦いになる以上、今日この時を除いて酒を酌み交わす機会など存在しない。

ま、俺はこいつらが七武海として一所に結集するのを知ってはいるが。奇しくも海賊王の息子の処刑にあたってという辺りが皮肉というか何というか。

「ふむ、良いだろう。だが何に乾杯する気だ？」

「新しくやってくる俺たちの時代に、さ」

好きだな新時代。二十数年後も似たようなこと言ってなかったか？

「キシシ、そいつぁ良い。金獅子が捕らえられ、海賊王が処刑される今、新時代と呼ぶに相応しい」

「やれやれ、俺は未成年なんだがねえ」

俺、ミホーク、ドフラ、モリアが席を立ち一つテーブルを囲む。そしてドフラ手ずからグラスにワインが注がれていく。

注がれたワインの色はこれからの時代に流れる血の量を暗示しているかのごとく、毒々しいほどに赤かった。

「それではこれから来る新しい時代に」「乾杯！！」「」

グラスを打ち合わせワインを煽る。願わくば原作の時代まで生きて

いられますように……

乾杯の後しばらくしてモリア、ドフラは店を出、俺が飯を食いミホークが酒を煽っていると遂に処刑一時間前になった。

ミホークが店を出たあと会計を済ませ店を出る。店員の顔には二度と来るなど書いてあった。

少しでも良い場所を確保するため足早に道を行くが、この場所から見えるほど広場は人で一杯のようだった。

しかたなく別の場所を探すために裏路地に入れば何者かにぶつかった。向こうも相当に急いでいたのか前を全然見ていなかった。俺だけが悪いわけではない。

「つてーなあ！気を付ける！！」

「すまん、すまん。だがそちらももう少し気を付けて走ってくれ」「んだとおく!?」

強者特有の気配を感じないからタダのチンピラかと思ったが、その顔を見て驚いた。

真っ赤で大きな鼻。ピエロのようなメイク。どう見ても若りし日の『道化』のバギーだった。

コイツが此処にいるって事は……

「おいバギー！！何やってんだ!?!」

「悪いシャンクス!!コイツがいきなり飛び出してきて」

エンカウント率高過ぎじゃないか?バギーはともかく後の四皇まで

出て来るとは。

しかもシャンクス強ええ。さっきの三人も相当の物だったが、連中
以上に出ているオーラが半端無いんだが。

「すまねえなアンタ。ほらバギー行くぞ!!」

バギーの手を掴むと有無を言わず引きずっていくシャンクス。あ
わただしいなあ。

にしてもあの二人此処に何しに来たんだろう? たぶんロジャーを助
けに来たんだと思うけど、ロジャーはそれを望んでいるように見え
んのだが。

「ま、俺の知った事じゃないか」

今回のことで学習したが、海は広いようで狭い。この世界で生きて
いる以上いずれ何処かで会うこともあるだろう。

つーかもうお腹いっぱいだ。これ以上原作キャラといらんフラグ立
てたくない。

「にしてもどこもかしこも人だらけだな。しょうがない屋根にでも
登って見るとするか。んーモデル『ラビット』で良いか?」

「うわっ!?!」

跳び上がるために体を変貌させると横合いから声が聞こえた。どう
やら変身するところを見られて驚かれたらしい。

見ると十歳くらいの子供が地面に尻餅をついていた。

「悪い、驚かせたか?」

襟首を摘んで立たせてやる。びびってそのまま逃げ出すかと思いき

や勇敢にも話しかけてくる少年。

中々に見所のある少年だ。このイーストブルーでは能力者って相当に少ないらしく、変身するだけで逃げ出す大人も珍しくないというのに。

「なあ兄ちゃん。変身して何処に行くんだ？」

「ん？屋根に登って処刑を見ようと思ってな。坊主も海賊王を見に行くのか？」

「うん。でも何処も一杯で全然見えないからどうしようかと思っていたところ」

「そうか、なら一緒に来るか？」

「いいの？なら行く」

「よし、ならしっかり捕まっけて置けよ。あとしっかりと歯を食いしばっけておかないと舌嚙むぞ」

少年に注意をしてから抱え上げ、屋根の上まで跳び上がる。そのまま屋根の上を疾走し広場を目指す。

予想通り広場は人でごった返っていた。あのままでは見える位置まで辿り着くことは出来なかっただろう。ましてやこんな子供なら大人に囲まれて見えなかっただろう。

「ところで坊主。お前何で処刑なんて見ようと思ったんだ？」

「坊主じゃない！俺にはスモーカーって名前があるんだ！！あと処刑を見ようと思ったのはタダの興味って、うわっ！？」

名前を聞いて煙突を飛び越え損なった。脚を引っかけて宙に飛び出す羽を広げて事なきを得た。

少年、いや若き日のスモーカー大佐か、彼はまさか落下するとは思っていなかったのか全力でしがみついているが、漏らさなかっただけ勇敢だろう。

「悪かったな坊主。まさかつまずくとは思ってもいなかった」

「へ、平気だ！後坊主って呼ぶな！！」

「坊主って呼ばれたくなかったらもつと強くなって俺を見返してみ
るんだな。そうすりゃ考えてやらんでも無い」

いやはや今日のエンカウト率はどうなってるのやら。にしても原
作キャラはもうお腹いっぱいって言っただろうに。

未だ名を上げていない後の四皇・七武海・海軍将校全部に当たるか
な？まあ海軍だけはスモーカーだけだからまあマシかと思ってい
たんだが……

「お前さんかい？能力者の誘拐犯って言うのは」

羽ばたいて屋根の上に戻ってみれば、待ちかまえるように海軍の一
団がいた。その中には非常に見覚えのある連中が数人。

中でも特徴のあるのが俺と大差の無いほどの長身の二人。

「ボルサリーノにクザン。若くして将の地位に就く二人が何で此処
に」

黄猿に青キジって悪夢か。おのれ神よ、そんなにも俺のことが嫌い
か？

どうやら屋根の上でどたばたやっていたら誰かに通報されたらしい。
余計なことを。

「すまんが大人しくしてくれるか？」

「いやいや、誘拐なんてしてるつもりは無いんだが」

「じゃあ何をしているのかな？能力者が変身するなんてよっぽど
のことだと思っけどね？」

流石に笑えない状況なのでスモーカー少年にお願いして誤解を解いて貰う。

誤解が元で賞金首とかマジ笑えん。ましてや目の前の二人を同時に相手するとかありえんだろっ。

幸いにも少年の説得により誤解はすぐに解けた。紛らわしい事するなど釘は刺されたが。

「はあ、マジで疲れた。もう帰ろっかな？」

これ以上広場に近づくと更にやばいのに会いそうで嫌なんだが。

しかし少年がせっかく此処まで来たんだから行こうとねだるので進む事になった。

一応戦闘禁止区域なので命の危険は無いとは思っが、どんどん墓穴に進んでいるような気がしてならなかった……

4・悪夢のローグタウン（後書き）

どうも三鳴雷です。

まさかのランキング入りに全力で吹いた。

せっかくなので調子に乗って続きを書いてみたが、少々欲張りすぎたかも知れない。

でも海軍側はともかく、賞金稼ぎでは“平穩に”海賊組と出会うのは此処を置いて他にはなかったので詰め込んでしまった。

にしても今回で処刑まで持っていきたかったんだが、余計なネタが浮かんで長くなってしまった。

スモーカーとは元々会わせるつもりだったが黄猿と青キジは出すつもりが無かったんだがねえ。

ちなみに原作キャララッシュは今回で終わりの予定。次回は二人ぐらいかな？

5・新しい時代

スモーカー少年を肩に乗せ、屋根の上をゆっくりと進む。

再び通報されるのは勘弁なので変身は解除し、余計な誤解を与えないように気を付けている。また通報されて今度は赤犬とか来たら問答無用で戦端が開かれるだろうしな。

と言うよりもさっきまでの原作キャララッシュでやる気その他諸々削られ、走ることはおろか歩くことすら億劫だ。

海軍にお説教をくらっていたせいで少し時間が経ったが、まだ処刑までは時間があるから別段急ぐ必要もないしな。

「なあ、さっきの海軍の人たちってここら辺のじゃ見ないけど何処の人たち？」

「ありやあ海軍本部の連中だ。海賊王の処刑を成功させるために出張ってきたんだろう」

「ふーん……ところでボルサリーノにクザンって有名な人たちなのか？」

「まあグランドラインじゃ有名だろうな。もし海賊が出会ったら死を覚悟した方が良さそうな連中さ。おまけに言っておくが連中クラスの階級になると純粹に強さが求められるから、あいつらはその戦闘能力においても海軍の上位20番以上にいると考えた方が良さかな」

この時代の大将にセンゴク以外の誰が着いているのかは知らんが、いずれも原作当時の三大将に劣るような人間ではないだろう。その下に中将達が続くが、後の青キジと黄猿は中将の中でも上位に位置しているだろうから、ひよっとしたらこの時代ですら海兵の中では一桁台の実力を持っているのかも知れない。

「にしても海軍に興味でも出たのか坊主？」

「んー此処一月ぐらいよく見るから格好いいかなーとは思っけど」
そりゃ格好良からうよ。原作ではモーガンやらネズミやらロクでもないのが悪目立ちしていたけど、実質この海の平和を守っているのは彼等だからな。少なくとも特別な力を持たないその他大勢に分類される海兵達は本当に命がけで平和を維持しているからな。ましてやこのイーストブルーの海兵達なんぞ一般人に毛の生えたような実力しか持ってないような人たちだし。

そんな感じで世間話をしていけば屋根の端、広場を見渡せる格好のポイントへと到着した。時計を確認すると処刑十分前だった。屋根の上は俺と少年で二人占めだと思っていたが、残念なことに近くに黒いフード付きコートを羽織った男が陣取っていた。他によく見える場所が無かったので、嫌な予感がしていたが近くに座ることにした。

時間があるので意外と静まっている広場を観察してみる。上から見ていると広場の様子がよく見え、あちこちに見覚えのあるキャラを見ることが出来た。と言うより強者「背が高いと言う図式でもあるのだろうか？巨体であるモリアはもちろんのこと、ドフラヤらミホークやらも一般人よりも頭一つ高いので良く解る。

外縁部から見守る海兵達の中にも見知った顔がちらほら。おっ、ガープ中将発見。横に居るのはセンゴク大将とコング元帥か。あちこち包帯巻いているのは金獅子とやり合ったときの物だろうか？んであっちに居るのはサウロ中将、つーか巨人族の将校も連れてきてたのか。町人達が物珍しそうにしているよ。

他にも名前は知らんがただ者ではない気配を纏った連中がうようよと。まるで二十年後の世界の縮図だ。

「おい、出てきたぞ！！」

静かだった広場がにわかに騒がしくなる。視線を上げ処刑台の方を見れば、両脇を抱え上げられた男が引きずられてきた。

「あれが海賊王ゴールド・ロジャー」

良くアレで生きているな。今の俺はかなり鼻が良いとは言え、この距離でもわかるほどの死臭。元々不治の病に侵されていたんだ。此処しばらくの獄中生活で一気に進行したんだろう。長くないどころじゃない、たつた今病死してもおかしくない。引きずられているのも仕方がなく、あれじゃあ立って歩くことすら辛いはずだ。

粛々と処刑台の上へ上げられるロジャー。まさに原作そのままの状態で些か感動を禁じ得ないが、あそこまで瀕死の状態で処刑台に登っているとは思わなかった。

海軍元帥によって罪状が述べられていが、これが随分と長かった。窃盗、殺人に始まり果ては世界政府反逆罪、国家転覆罪等々。まあ海賊というだけで罪なのだ。その代表選手たる王ならばそれぐらいにもなるか。

長々とした罪状が終わり、遂に処刑の時間となった。そして僅かに空いた時間に広場からあの言葉が聞こえた。

「教えてくれ海賊王！！アンタの財宝は何処にある！？」

誰が言ったのかは解らない。だがその声は静まりかえった広場に大きく響いた。

そしてその声を引き金にロジャーから莫大な圧力が溢れた。先程まで死にかけていたとは思えないほどのオーラ。ロウソクが燃え尽き

る前の一時の輝きだろうが、俺の目の前には“世界の偉大な海の王”の姿があった。

「おれの財宝か？欲しけりゃくれてやるぜ・・・」

普通に話しているような声だが、広場の端にいる俺たちの所まで良く聞こえた。

処刑人達は圧力の為に刃を振り下ろすことが出来ない。名だたる海兵達も言わせまいと飛び出そうとするが、ロジャーはそれを制して見せた。おそらくあれこそが霸王色の覇気なのだろう。

「探してみる。この世の全てをそこに置いてきた」

笑った。余りにも印象深い、何かを感じさせる笑みだった。

そして唐突に圧力が消失した。ひよつとしたらこの時点で事切れていたのかも知れない。その上に圧力から解放された処刑人の刃が落ちる。

上がる血しぶきと、観客達の歓声。歓声は海賊王の死によってもたらされる平和に安堵する民の物ではなく、海賊王の財宝に目が眩んだ荒くれ者達の雄叫びの方が圧倒的に多かった。

次の瞬間には我先に港へと駆けだしていく観客達。

此処ローグタウンはグランドラインの入り口であるリヴァースマウンテンにほど近いから、グランドラインへ早速乗り込もうと言うのだろう。はたしてこの中で原作当時まで生き残れる者達はどれだけいるか。

ロジャーの死を悼むかのように雨が降り始め、処刑されたロジャーの亡骸がいくかへと運ばれていったのを見送った。

俺も熱くなっていたのだろう。ただ座っていたただけだというのにもの淒く疲れた。

広場からある程度人が去った後、ふと気配が増えたことに気付きコートの方を見れば、ガープ中将が男の傍らに立っていた。雨音がうるさいが、高性能な俺の耳は二人の会話を捕らえていた。

「久しいな馬鹿息子」

「親父……」

「説教は後じゃ。ちと相談したいことがあるから付いてこい」

俺のことを気にしているのが良く解る。努めて自然な状態を維持しているが、あの二人には俺が耳をそばだてていることぐらいお見通しだろう。もちろん一言一句聞き漏らしていないとまでは気付いていないようだが。

ガープ中将とコートの男はこちらを一別した後屋根の下へ飛び降りいずこかへと去っていった。

にしてもあのコートの男、まさかドラゴンだったか。まだそれほど名が知れていないようだったが、後の世界最悪の犯罪者とニアミスしてたとは……。声かけなくて良かった。

「ふうー……」

今日一日で出会った原作キャラ達の顔ぶれを思い出すと思わずため息が出た。

繋ぎが出来たと考えれば損ではないのだが、それ以上に自分を殺せるような連中に連続して会い続ける事による疲弊の方が問題だ。生半可な相手に負けることはないという自信はあるが、今日会った連中に今の付け焼き刃の戦い方しかできない俺ではちと厳しい。

僅か一ヶ月前には喧嘩一つしたことがないほど平和に暮らしていたんだ。今ある俺の“強さ”は全部借り物でしかない。神に与えられ

たこの体も、四天王を模した必殺技も、悪魔の実もすべて俺本来の強さではない。一応ある程度の戦闘経験もこの世界に送られてきたときに付属していたが、この体を十全に使った“戦い方”と言う物を構築しきれていないのだ。

このまま賞金稼ぎを続けていけば、いずれは身につく物だとは思うのだが……

「なあ兄ちゃん。さっきから何を唸ってるんだ？」

おっといけない、少年のことをすっかり忘れていた。俺一人なら何時までも此処に留まっても風邪を引くことはないだろうが、少年を雨ざらしにしっぱなしにするわけにはいかんだろう。

一応弁解しておくが、俺が風邪を引かないのは馬鹿だからじゃなくグルメ細胞のせいだからね？

「悪いな坊主。お前さんの事すっかり忘れていた。風邪引くといけないから家まで送ろう」

「いいよ別に。下に下ろしてくれば家はすぐそこだし」

「そうか？ともかく降りるから掴まれ」

屋根のふちに髪を絡ませスルスルと降りる。つくづく便利な髪の毛だが、これってどういう原理で自在に動くんだろうか？CP9のクマドリみたいに生命帰還、バイオフィードバックの一種だろうか。

「ありがとう兄ちゃん!!」

「どういたしまして」

少年の頭に手を乗せクシャリと撫でる。少年は子供扱いが気に入らないのかしかめっ面をしていたが。

「さて、そろそろ行くとするか」

「もう行つちまうのか？」

「ああ、目的も果たしたしな」

これ以上長居するとより厄介な奴とかに会いそうな気がするから、
サツサとこの島から出たいと言うのが本音だけどね。

「じゃあな坊主。縁があればまた会うこともあるだろう」

そう言つて羽を伸ばし跳び上がる。屋根を足場に更に高く跳び上がり、羽を広げて風に乗る。兩脚が強くて些か飛びにくい、まあ何とかなるだろう。

街を見下ろせば俺に向かつて手を振る少年が見えて苦笑する。お返しに「風邪ひくなよ」と込めた音玉を飛ばしてやれば、ビックリして辺りを確認する少年。

些細ないたずらが成功した俺は、幾分軽くなった気分でローグタウンを去った。

そして跳び続けること半日、俺は今現在拠点としている島へと帰ってきた。この島はイーストブルーに幾つかある交易の要となる島だ。イーストブルーは言うまでもなく広い。そしてそこに存在する島も数知れず。当然島と島を繋ぐ航路も無数にある。だが航路という物はよく使われる物から滅多に使われない物など雑多に存在する。よく使われる航路は比較的安全で、使われない航路は海賊が出没する可能性が高い。

その差となる物は主に海軍支部の存在と、その巡回航路にある。こ

の島にも当然のごとくかなり大きな支部が存在するため特に平和で、そこから別の支部に出される巡視船の航路は海賊が近づかないから安全なのだ。

安全な航路に商人達は集まる。海賊に襲われれば破産する可能性が高いのだから当たり前だ。そして商人が行き交えば港は栄える。そうすれば人が集まり街も大きくなると言うわけだ。

そう言った港が交易の拠点としてイーストブルーはもちろんのこと、他四つの海にも形成されている。

「ちわー、戻ったよ」

「おう、お帰りヨイチ。どうだった？」

俺に挨拶を返すのはこの島で宿兼食堂を経営する元賞金稼ぎのフガクさん。賞金稼ぎ仲間からはフガクの親父さんと呼ばれて慕われる人だ。ちなみにロジャーの若い頃によくやり合ったことがあるらしい。

俺は今この親父さんの宿に厄介になっている。一応賞金稼ぎのいろはを教えてくれる師匠でもある。

意外かも知れないが賞金稼ぎはただ賞金首を狩っていれば良いだけの職業ではない。

と言うよりも賞金首を狙うのは結構リスクなのだ。考えてみて欲しい。海賊は大抵徒党を組む。その内賞金首は一人ぐらい。

例えば100万ベリーの賞金首が10人の部下を従えているとしよう。一人で狩る場合10人を瞬殺出来れば良いが、それを相手にしながら賞金首とも戦わなければならぬ。ならばこちらも集団で挑めば、今度は賞金が山分けで減る。10人で狩れば一人頭たったの10万ベリーだ。

おまけに海賊を探すのにもそれなりの金がかかる。情報量や海賊達の所まで行く航海の食料その他諸々。はっきり言って割に合わない。

そして言うまでもないことだが賞金が上がるにつれてその危険度も跳ね上がる。

もちろん俺やゾロのように一対多でも勝てるだけの実力者なら賞金専門の賞金稼ぎも出来るが、世の大半の賞金稼ぎはまずそれはできない。

ならばどうするか。答えは簡単、それ以外の仕事をすればいい。賞金稼ぎを稼業に選ぶほど腕っ節に自身があれば船の用心棒に重宝されるのだ。海軍の主要航路から外れた海に行く場合どうしても海賊への備えが必要となる。賞金稼ぎからすれば乗っただけで給金が貰え、海賊との遭遇率も上がるとあって多くの賞金稼ぎは自分で船を持つのではなく、こういう雇われ用心棒を職とする者が多かりりする。

もちろん命がけの仕事になるし、相手が悪いからと逃げ出せば二度と声がかからないと言うリスクがあるが。

その他にも猟師・漁師達の依頼で森を荒らす猛獣や漁場を荒らす海獣を退治して金を得るなんて仕事もある。

その事を知らなかった俺は辺り構わず海賊を狩りまくっていたせいで、賞金稼ぎ達から結構疎まれていたらしい。

初めてこの食堂に来たとき賞金稼ぎに絡まれて困惑し、そこを親父さんに諭されたというわけだ。

ロジャーの処刑は元々見に行くつもりではあったが、親父さんに代わりに最後を看取ってやって欲しいと言われたのも、ローグタウンを訪れた大きな理由だったりする。

「海賊王の名にふさわしい見事な死に様だったよ」

「そうか。あいつとは何度も戦ったが結局勝てなんだな。ところであいつは死ぬ前に何か言ってたか？」

「それが聞いてくれよフガクさん」

ロジャーの末期の言葉を教えると腹を抱えて爆笑するフガクさん。

「ブハハハハ、全くあいつらしい最後じゃねえか！ロジャーは死せどもその意志は消えず！今頃政府の連中も青くなってるだろうよ！」

ひとしきり笑った後不意に真面目な顔になる。

「しかしロジャーの小僧、厄介な置きみやげを置いてってくれたもんだな」

「ですね。これから海は荒れるでしょう」

この世の全てとまで言い切ったロジャーの財宝の誘惑は強い。自身を計り損ねた有象無象どもが一旗掲げるために海へと繰り出してくるはずだ。

おそらく賞金稼ぎの中からも海賊へ転職するような連中が増えてくるだろう。俺たち賞金稼ぎはどちらかと言えば海軍よりも海賊よりだ。所詮は海賊も賞金稼ぎも狙うは一攫千金、違うのは手段が合法か非法かの違いくらいしかない。

「全くあの小僧は何がしたかったんだろうな？」

「さあ？それは本人に聞かなきゃ解らんでしょう。とはいえ相手は故人ですから知る機会は一生来ないでしょうけどね」

長い航海の果てに何を見たのかなんて俺に解るわけ無いじゃん。親父さんも端から答えを期待していなかったらしく、カウンターにグラスを三つ置いた。

「まあいい。ヨイチ、一杯付き合え」

グラスに酒を注ぎ、内一つを俺へとよこす親父さん。そして自らもグラスを持ち、残る一つのグラスに目を細めた。

「なあロジャーよ。お前みたいな大馬鹿野郎が死んでも悲しんでくれる奴など殆どいないだろう？可哀相だから一杯奢ってやらあ」

チンツとグラスを打ち合わせ、親父さんは一気に酒を煽った。

俺も親父さんにならないグラスを合わせ、一息に煽った。

今日一つの時代が終わった。明日からは新しい時代“大海賊時代”の始まりだ。

5・新しい時代（後書き）

こんばんわ、三鳴雷です。

うーん、何か文章がまとめきれしていない感じがする。ひょっとしたら修正するかも知れません。

それはともかく次回からイーストブルーから別の海に向けて旅を始めます。

残念ながらグランドラインにはまだ入りませんよ。

あと感想の返しです。

まずは感想ありがとうございました。で、色々読んでいってやっぱりというか何というか、水中戦のことを突っ込まれてしまいましたね。

一応水中戦はデッケン（悪魔の実を食べた魚人）が水中で息が出来るかどうかで今の案が使えるかどうかで多少変わってくるので、もう少々お待ちください。

まあシャボンコーティングで水中戦が出来たから、シャボンに変わる“何か”を生成すれば出来ん事も無いんですけどね。

6・初めての護衛

カランと入り口に付けられたベルが鳴り、食堂に来客があったことを知らせた。

フガクの親父さんの所で遅めの昼食を取っていた俺は皿の山のスキマから来客者に目を向けた。

この店は元賞金稼ぎの親父さんがやっていることもあり、客は賞金稼ぎや情報屋、冒険家や船乗りなんかが多い。とはいえ一般の客も普通に入ってこれるが、今入ってきた商人風の男達は明らかに食事目的の客では無さそうだ。

となるとこの食堂のもう一つの仕事、賞金稼ぎへの仲介の方の客か・

「久しぶりです親父さん」

「おお、バルトの所の小僧じゃないか。いや久しぶりだな」

「はは、小僧は止めてくださいよ。これでも親父から船を預かってそれなりに経ってるんですから」

「ブハハハ、俺からすりゃまだまだひよっこだよブラン坊や」

ふむ、バルト商会か。イーストブルーじゃあそこそこ上級の会社だったな。確か主に扱っていたのは茶とかコーヒートか飲料系だったはず。一級品から安価な物まで手広く扱っていたな。

それにあつちのはこの店にも酒を卸している商会の人間、向こうのは長距離客船を生業にする船長。個人、小商家向けの貨物船の船長もいるのか。

「にしても俺に何のようだ？こんな面子で飯を食いに来たわけでもあるまい？」

「それなのですが賞金稼ぎ、と言うか傭兵・用心棒を雇いたいので

す」

やっぱりそれか。バルト商会の本社はマリージョア側だったはず。と言うより大商会と呼ばれるような会社は大抵マリージョアに近い場所に本社を構えている。

何故ならマリージョアは商業界においては間違いなく世界の中心に位置しているからだ。東西南北の海に接した交易可能な場所はそこしかない。レッドラインの反対側も四海に接してはいるが、そちらにはリヴァースマウンテンが邪魔で交易には不向きだ。

そんなわけでマリージョアより低い場所に作られた交易都市にはグランドライン含め様々な物が集まる。むしろ他の海の品物など此処以外ではまず手に入らない。レッドラインで隔てられている東と北南と西はレッドラインの比較的標高の低い場所を通じて少しは交易が行われているが、グランドラインで隔てられた東北と南西間は交易など出来ない。

故に世界政府の旗になぞらえて商人達はマリージョアの事を中央と呼んだりする。

そう言った事情から交易商社はまずマリージョアにほど近い島に本社を置いているのだ。ちなみにマリージョアから遠いローグタウン辺りなどは辺境というか田舎というか、まあ中央近辺の人たちに余りいい印象を持たれてはいない。おまけにここ最近ではグランドラインに入るために海賊やら何やらが次々押し寄せてきているので治安も一気に悪くなった事だし。

「ここ最近この辺りでは海賊が暴れ回っており、既に幾つもの船が襲われています。今までなら海軍の船に同行していればまず襲われることはなかったのですが……」

「確かにロジャーが死んでからこっち、名を上げるためにわざわざ海軍を襲うような馬鹿まで出てきちゃあな」

「我々の船にはこの辺りでの売上金が積み込んであります。もしこれが奪われるようなことになれば我が社は大損害です。そうなれば我々バルト商會はこの辺りの取引から手を引かざるを得ません」
「うーむ、お前さん所には良い茶を卸して貰っているしな。よっしゃ、仲介の件引き受けさせて貰うぜ。で、何人を幾らぐらいで雇いたいんだ？」

大体用心棒一人当たり一日一万ベリーが相場だ。結構高額だが24時間拘束し、クルーとしてもある程度働かせる事を考慮しての賃金だから、普通のクルーよりやや割高になってしまつのは仕方がないだろう。

その分賞金稼ぎが死んだ場合、あらかじめ指定された振込先が無い場合払わなくても良いと言う利点もある。

「そうですね・・・今回の仕入れ値がこれで、儲けがこれだから・・・」

「うちの所で出せるのはこれくらいが限度で・・・」

「うちは客船ですから名だたる賞金稼ぎが雇えればそれなりの集客は得られますが・・・」

商人達は集まってソロバンを取りだしパチパチとやり始める。用心棒を多く雇えば安全に航海は出来るだろうが、赤字になっては元も子もない。とはいえこういつた商船は品物を積んだ行きよりも売上金を乗せた帰り道の方が遙かに危険だから、下手にケチって売上金全部失うよりはマシだろうが。

「うちのクルーも銃ぐらいは撃てますから10名ほど腕利きを雇い入れたいのですが」

「何日ぐらいの航海の予定だ？」

「本社までなので15日ほどでしょうか。日当は一人1万出しまし

よう」

何事もなくとも15万ベリーか。まあそんなところかな。命がけの仕事にしては安く感じるかも知れないが、海賊に襲われなければ普通の仕事だからこれくらいが妥当なのだ。

その分海賊に襲われ相手を撃退した場合、賞金は賞金稼ぎ達の総取りになるのだから悪い話ではない。

「しかし腕利きか。今皆出払ってるんだよな・・・そうだ。おいヨイチ、お前どうだ？」

やっぱり俺か。大海賊時代（まだ正式に呼ばれてはいないが）に入ってから海賊が活発に活動しているせいで商船・客船から用心棒として雇われていく賞金稼ぎが多く、今現在人手不足に陥っている。おまけに賞金稼ぎから海賊に鞍替えして賞金首になるような馬鹿がいるせいでより人手が足りない。

そのせいで普段ならこの食堂で依頼を待っている賞金稼ぎが何人かいるのだが、今食堂にいるのは俺一人だけだ。俺は海賊を襲撃するのがメインだし、護衛の仕事をメインにしている連中の縄張りを侵して文句を言われたくない。

その事は親父さんも良く解っているはずなのだが。

「今はお前ぐらいしか暇な奴いないんだから別に構わんだろう。それにお前には賞金稼ぎの事は粗方教えたからこれを機に好きに動いたらどうだ？」

うーん、確かに良い機会かもしれない。最近ここの辺の海賊では満足できなくなってきたんだよな。ただでさえ懸賞金アベレージの低いイーストブルーでは一千万越えなど殆どおらず、百万越えですら数えられるほどしかない。この世界に来て僅か一月と少しのうち

に一千万越えと二回も遭遇できたのは奇跡に近い。もつとも、賞金首が減ったのは俺が乱獲しているせいでもあるのだが。

「そうだな。そろそろ食探しを再開しても良いかもしれんかな」

あと重要なことだが、ここら辺で狩れる生き物は大半食することが出来たと思うし、ガイドブックに載っている店も行き尽くした。そろそろ新しい美味を求めても良い頃だと思う。

それにどのみち別の海に行くにはマリージョアの方へ行かなきゃならんのだから渡りに船と言ったところか。空が飛べてもレッドラインやグランドラインの上空を飛ぶのは骨が折れそうだし、俺の運の悪さをかんば見るに気がついたら空島なんて事になりかねないからな。

「それじゃ決まりだな。ブラン坊や、コイツが船に乗ってくれるそうだな」

「ヨイチというと最近『悪食』の名で呼ばれている方ですね。バルト・ブランです。どうぞよろしく」

「クドー・ヨイチだ。よろしく」

護衛の仕事は初めてだが、はたして満足のいく仕事が出来らるか？

用心棒の募集は海軍の定期便が出る3日後まで行われたが、結局10人集まることなく出航の日を迎えた。今回海軍の船に引っ付いていくのはバルト商会の船含め計5隻の船団。船の大きさはバラバラだが、一応海軍船について行けるだけの脚はあるらしい。

そして俺と共にこの船団を守るのは6人の賞金稼ぎと150名のクルー達だ。賞金稼ぎ達とは出港日の朝に顔合わせを行った。半数は親父さんの店での顔見知りだったが、残り三名は中央からの護衛の帰りのついでに雇われた連中だったので俺が『悪食』と知って随分と驚いていた。船員達は俺の通り名を聞いて心強いと歓迎ムードだった。

その他の乗員は雇い主であるブランと商人17名、客船の乗客80名。今まで勝手気ままに旅をしてきたが、これだけの人数の命を預かっていると思うとそれなりに緊張する。

今回の航海の行程だが、4〜5日に一度港へ寄り補給と客船の下船が行うと言うのを2回入れた計15日の予定だ。まあこれはあくまで予定で、時化や海賊の襲撃で多少変わってくると言うことだが。

「おーいヨイチ、休憩の時間だぞー」

「おう、ありがとさん」

今回の仕事で良かったのは、賞金稼ぎの中でも仲の良い奴と組めたことだろうか。二丁拳銃をメインに使うレイズという名の賞金稼ぎで、賞金稼ぎ歴は2年らしい。腕はまあそこそこだが、人当たりの良い性格なので用心棒としては中々に人気らしい。

「しっかし、船の護衛は初めてだが結構忙しいもんだな」

「初めてじゃ色々勉強しなきゃいかんだろうがまあがんばれ」

帆船はほつといっても進むというわけではないので色々やることが多い。用心棒と言っても一応クルーとして雇われているのでやるべき事はやらなければならない。

俺は船についてはドシロウトなので覚えなければならないことが多くて四苦八苦している。俺は専門用語すらねえからもうちょっと解

りやすく教えて欲しかった。面舵と取り舵の違いすら知らないんだから……

とはいえ丸2日航海をしてみればある程度のことは解ってくる。まあ航海士の言うとおりにはやっているだけだがね。

そんな感じでこの二日間は順調に進んでいたのだが、遂に邪魔者が現れた。

「9時の方角に海賊船を発見!!」

見張り役のクルーが声を上げると船は一気に緊張感に包まれる。船長が他の船に電伝虫で警告を行い、甲板に大砲が運び込まれクルー達が銃を持ち出す。この船に集められた賞金稼ぎ達も各々自分の武装を整える。

「何処の海賊だ？」

「海賊旗はドクロに交差する大砲! 相手は『大筒』です!!」

「ちっ、厄介な野郎が現れやがったな」

「なあレイズ、大筒ってどんな奴だったっけか？」

「『大筒のバズ』は名前の通り大砲屋だよ。最新鋭の大砲でこっちの射程外から撃ちまくってくる奴だ。あいつは軍船も沈めてるから、今回も海軍が余り役に立つとは思えねえ。それにあの船の海賊達は銃の扱いにも長けた連中が揃っていたはずだ。正直この船団のクルーじゃ太刀打ち出来ねえんじゃないか」

なるほどそう言う奴か。この世界でも銃は強力な武器だからな。あの一線を越えたような連中や能力者には利きが悪いが、それでも対人戦では無類の強さを発揮する。

ほれと言って手配書を渡してくるレイズ。ふむ賞金は350万ベリ
ーね。

「撃ち合いじゃまず勝てないだろうな。この場合海軍が盾になってくれている間に逃げるのが正解だろう」

「ふーんそんなもんかね」

「そんなもんって、それ以外に無傷で切り抜ける方法は無いだろうが。今回俺たちは護衛だから何も無理する必要は無いんだよ。それともこの船無傷で逃がす方法があるのか？」

「んー？別にこの船が射程に入る前に向こうを沈めりゃあ良いだけの話しだろう？」

「んな無茶苦茶な事が出来るわけ無いだろうが」

「出来るぞ」

「は？」

「だから出来るって。まあ今回は雇われだから海軍の面子もあるだろうし許可無ければやらないけどな」

俺の言葉が信じられないのか顔を引きつらせるレイズ。他のクルー達もあり得ない物を見るような目でこちらを見ている。

そこへ俺たちの話を聞いていたのか雇い主であるブランさんがやってきた。

「つまり、私が許可を出せば何とか出来るわけですね？」

「まあ出来ますよ。船長を捕らえらるとなると話しは別でしょうが、船を沈めるくらいなら」

そう言うと考え込むブランさん。しばしのと電伝虫の方へと向かい、何者かと交渉を始めた様子。一分ぐらいで交渉がまとまったらしく、笑みを浮かべてブランさんは戻ってきた。

「海軍に許可を得ました。何でも『やれる物ならやってみろ』だそうです。雇い主として許可します。大筒の船を撃沈してください。

もしそれが出来なければ給金無しでこき使っつもりですのでそのおつもりで」

強かだな。俺を大言壮語の馬鹿者か、それともそれが可能な強者かを見極めるつもりなのだろう。どちらでも自分に取っては損がないように仕向けるのは流石商人と言うべきか。

だが雇い主から許可は出た。ならば思う存分暴れるだけだ。

「ちょっと離れといてくれレイズ」

「おいいくら何でも無茶だつて。まだあんなに離れてるんだから幾らお前が強くてもあそこまでは行けないだろう？」

「おいおいレイズ、お前俺が悪魔の実の能力者だつて忘れたのか？」

そう言うつと能力を発動させその姿を変えていく。獅子の姿をメインにコウモリの翼とサソリの尾を持つ怪物の姿を見て周囲の人間の顔が驚愕に染まっていく。

「このモデル『マンティコア』なら羽があるから空ぐらい飛べる」

「……おいヨイチ、前に見たのと随分と違う姿なんだが」

「俺のはそう言う能力なんだ。気にすんな。それじゃあ行って来ますねブランさん」

「あ、ああ。気を付けてな……」

帆が邪魔なので船の前部から飛び立ち、気流を掴んで加速する。

この二日間狭い船暮らしで些かストレスが溜まっていたが、こうやって空を飛んでいくと爽快感でストレスが洗い流されていく。

「おつと危ない」

心地よく空を飛んでいると砲撃での歓待が来た。体を捻れば砲弾が

通り過ぎ水柱が上がる。今まで何度も砲撃は受けたが、それらと比べて確かに飛距離が長いようだ。加えて射撃が得意というクルー達の話しも本当らしく、ライフルらしき銃弾も何発か飛んできている。一直線に飛び続けてはいいなので円を描きながら接近することにした。距離が近づくにつれ砲撃・銃撃の数も増えてくる。遠目では良く解らなかったが、あの海賊船ハリネズミのように大量の大砲を積み込んであるらしい。

「横から撃ち合うのは面倒だな。ならこっちか」

「左舷弹幕薄いよ、何やってんの」とおちよくりながら円を描きつつ高度を上げていくと、とたんに砲撃が散発的になっていく。普通船の大砲なんて真上に撃てるように作ってないだろうから当たり前か。帆も邪魔だろうしね。

このまま急降下して襲撃しても良いのだが、ライフルや拳銃は健在なので銃弾の中をわざわざ進むのも何だから一当てしてから降下することにした。船の真上を取ると俺は大きく息を吸い込んで大口を開けた。

「！！！！」

口から打ち出すのは巨大な音の塊「ボイスミサイル」。それは散発的に飛んできていた銃弾を弾き飛ばして船の中心へ直撃、炸裂する。未だ完全に使いこなせた技ではないので本家に比べると威力は落ちるが、甲板を吹き飛ばすには十分すぎる。

海賊船が沈黙したのを見届けると、賞金首や財宝が残っているかも知れないので船へと降り立つ。

「ちとやりすぎたかな？この中から探すのは骨だな」

予想以上に威力があつたらしく、船はマストさえ吹き飛び残骸で埋まっていた。放っておけば数分もすれば沈むだろうという有り様に、今回は護衛だから賞金は良いかと諦めかけていたのだが……

「テメエエ

！！良くも俺の船をおお

！！」

おお生きてたよ船長。てつきりあれで死んだと思っていたが中々にタフな。しかし実に運がない。あのまま静かに隠れていれば俺に見つかることもなかっただろうに。

「消し飛べバケモンがあ！！」

残骸の下から現れた大筒は船を破壊されたことにぶち切れているようだ。中々に力持ちらしく、結構大きな大砲を腰ダメに構えぶつ放してくる。

ふむ、それに対して俺はどう返すべきだろうか？フライ返しで十分おつりが来る相手だが、砲弾の直撃喰らって跡形もなく吹き飛ぶと換金が出来ないんだよな。かといってただ避けるのも芸がない。意表を突いて受け止める？あ、そうだ、あれをやるう。

「あーん、バグン！！」

今の俺ならたぶんできるだろうと言うことで、アロンみたいに砲弾を噛み砕いて見せた。それを見た大筒は虎の子の大砲が役に立たなかったことに呆然としていた。

「ボリボリ、ベツ！クソまじい」

だが正直やって後悔した。鉄臭いわ硝煙臭いわで堪ったもんじゃない。自分でやっという何だが、マズイ物を食わされて些か腹が立つ

たので少々痛い目を見せてから捕まえることにした。垂らしていたサソリの尾を持ち上げ高速で打ち出す。長く伸びた尾は、それに反応できなかつた大筒の胴体にまともに突き刺さった。もちろん毒サソリの尾なので先の針より毒を流し込む事が出来る。今回流し込んだのは俺特製の痺れ薬と非致死性の激痛を与える猛毒。それらを打ち込まれた大筒は麻痺して声こそ出せない物の、その今にも死にそうな顔でどれ程の激痛が良く解る。

「さて、お宝まで探す余裕は無さそうだ。未練を残さないためにも沈めていくか」

尾で大筒を絡め取り右拳を振り上げる。さて、今の俺なら何連までいけるかな？

「2・・・3・・・4・・・5、うーん5連が限界か。まだまだ旨い物を食べ足りないのかね？まあ良い、まずは沈んでおけ」5連釘パンチ」！！」

必殺技を船、と言うかほぼ船の残骸に叩き付けて跳び上がる。一拍おいて船に衝撃が走り真つ二つにへし折れる。その後も衝撃は続き最終の5撃目には派手に水柱が上がる。

「さて、帰るか」

いやあ今回は軍船が近くにいるから換金が楽だ。一応こういう護衛業の時には守っている賞金稼ぎ全員で山分けしなきゃいかんらしいがまあ良いか。今回は船を守るのがメインの仕事だから海賊船を沈めるのはあくまでついでだし。

そう良いように考えた俺は上機嫌で船団へと舞い戻っていった。

6・初めての護衛（後書き）

どうも三鳴雷です。

今回は独自設定の多い回でした。ワンピースって商船とか殆ど出てこないから護衛とかどうなっているのかとか考えながら書いてみたため、上手く伝わったか心配です。

前回の後半もそうでしたけど、やっぱり海軍の巡視する航路って安全だと思っんですよね。その海軍の船と一緒に航海できれば尚良しって感じで。

でも海軍だけじゃ不安だから用心棒も雇うわけで、と言う感じのが今回のお話。あと船団を組んだのは実際一隻で逃げるより、まとまって航海してばらけて逃げた方が逃走の確率も上がるからです。

・・・補足多いなあ。

あとワンピースの世界の平均収入がわからないので、賞金稼ぎ達の雇料費が安いような気がするのが何とも・・・

7・トレードマークを手に入れた

大筒の一件以降も幾つかアクシデントはあった物の、航海は予定の半分を消化した。

しかしその船団の中に海軍の船はない。二日前のことだが再び別の海賊が現れ、海軍の船が航行不能になったからだ。戦闘自体は相手が百万にも満たない小物だったから楽勝だったらしいが、何でも大砲の撃ち合いで舵輪が吹き飛びマストも損傷したらしい。

ちなみに昨日は俺たち賞金稼ぎに出番は無かった。理由は前回俺が無双したのが酷く気に入らなかつたらしい海軍がメンツにこだわった為だ。

その為破損した軍船を近くの港まで曳航して行く必要が出たため多少タイムスケジュールが狂ったらしいが、商人達に言わせれば良くあることだから問題ないらしい。

ただその際問題となったのはこのまま応援の海軍を待つか、それとも進むかと言うところである。

通常は少々の不利益が出ようともそのまま港に留まるらしい。しかし百万越えの賞金首を物ともせず、既に一千万越えを二人も狩っている俺がいるせいで、進むを選択する商人達が出たため色々揉めたいらしい。

正直俺に頼り切るのは止めて欲しい所ではあるが、所詮雇われなので雇い主の意見には従わなければならない。断ることも出来るが商人の心証を悪くしても良いことなど無いのである。

そして結局全ての船が先へ進むことを選択した。そこまでは良いのだが何故か俺が船団の戦闘の取り仕切りを任されることになったのは納得がいかない。

「あー、何か割にあわねえ……」

今までが好き勝手賞金首を狩りまくって莫大な懸賞金を得ていた俺からしてみれば、15万ベリー程度でそこまで面倒見るのは些か納得いかない。

商人達に恩を売ったと思えばそこまで損をしているわけではないと思わなければやっていけない。

「まあそう言うなってヨイチ」

「レイズよお、そうは言うけどまだ半分なのに二回も襲撃受けてるんだぞ？この分じゃあと二回、最低でも一回は襲撃受けるんじゃないの？」

「はは、まさか。幾ら海賊王の処刑からこっち海賊の数が増えているからと言って、そこまで遭遇しないだろ」

俺の運の悪さを舐めるなよレイズ。俺の運の悪さから言って絶対遭遇する自信があるぞ。……全然自慢できる事じゃないがな。

「くあー、せめて雑魚が寄ってこないような方法は無いもんかね？そこそこ強い敵となら俺も修行になるんだが、あんまり弱すぎると踏みつぶすのも面倒だ」

「さっすが異名持ちは違うね。しかしそう言った雑魚が寄ってきてくれないと俺みたいな賞金稼ぎはおまんまの食い上げだよ。一千万越えなんかと命がけで戦うより、小金を稼いでいた方がこの業界じゃ長生きできる」

賞金稼ぎは結構早死にしやすい職業だ。極悪非道の賞金首の命を付け狙っているのだから当然だろう。

原作で賞金稼ぎは殆ど描かれていないが、シャボンディ諸島でルフィ達を狙った連中、もし他の、例えばキッドなんかを狙ってたら確

実に死んでいただろう。

そう考えると、ヨサクとジョニーはアーロンに喧嘩売って良く生きていたな……

「しかしまあ、お前ほど名が売れてるなら雑魚を寄せ付けない方法はあるぞ」

「へえ、そんなのがあるのか？フガクの親父さんは教えてくれなかったが……」

「この方法は諸刃の剣で、雑魚はまず寄つてこないがその分腕に自信のある強者を呼び寄せやすいのさ。大抵この方法をやった奴は、最後は後に名を残すような大海賊と遭遇して命を落とす。だから親父さんも教えてはくれなかったんだろう。でもまあ……」

そこまで言つてレイズは俺を上から下まで眺め難しい顔をする。

「今のお前じゃちょっとこの方法は取れないかな？」

「ああ？どういふことだ」

「まずは順番に話そうか。俺の言う雑魚を寄せ付けない方法つて言うのは乗つた船にシンボルマークを示すことさ」

「シンボル？そんな簡単なことで良いのか？」

「ああそうだ。海賊がドクロを掲げ、海軍がカモメを掲げるように自分の“威”を示す」

確かに商船なんかは掲げられたドクロを見ただけで降伏するなんて事もあるらしいから、言わばその逆をやるつと言ふことか。

そりゃ最後は非業の死も遂げるわ。賞金稼ぎとして名が売れると言ふことは、海賊から恨みを買つて事だからな。ましてや海軍と違つて組織としての後ろ盾がないから、海賊からしたら手っ取り早く名を上げる為に狙いやすいだろうよ。

「それで、何で今の俺じゃあこの方法は取れないんだ？」

「それなんだが……お前特徴がないんだよ」

「は？」

「普段の格好はズボンにタンクトップって特徴がない。戦闘中はインパクトあるけど毎回同じ姿で戦ってないだろ？だから名前は売れているけど実際お前って正体不明なんだよ。だから今のお前じゃシンボルになるようなものなんて無いだろ？」

確かに海賊と違って手配書が出回るわけではないから、賞金稼ぎって取材を受けて新聞にでも載らない限り顔が知られていないことが多い。当然俺は取材なんて受けていない。

ましてや俺に至っては性能を試すために毎回違うモデルで戦っているから顔を合わせても俺って解らないだろうし。元となる一種だけのモデルだけでも既に数百種、二種以上を混ぜ合わせた混成モデルに至っては数えきれないほど作り出せるからな。

そりゃ『悪食』の名が広まっても誰も俺のことだって解らないわな……道理で自己紹介のたびに驚かれるわけだよ。

「もうちょっと特徴のある姿でもしてれば解りやすいんだけどな。

例えば入れ墨を入れるとか、奇抜な服装をしているとかな」

「入れ墨はパスだな。日常生活でも異名を引きずるのは勘弁だ」

「じゃあ何か特徴のある物を身につけたりするんだな。後はそれを模した物を船長に許可貰って船に掲げるだけだ」

特徴のある物ねえ……。いつそ麦わら帽子でも被ってやろうか？

「そついや貨物船には行商人達が乗り込んでいるから何か売って貰ったらどうだ？」

「そつだな。此処で考えているより現物見た方が良いか。そんじゃちよっくら行ってくるわ」

「おー、気を付けてな。間違っても海に落ちんなよ」

そう言うわけで貨物船までやって来て商人達に品物を見せて貰っているのだが……

「うーむ、イマイチパツとしないな」

何人も商人が荷を預けているだけ有り、装飾品やそこの商店では扱っていない珍しい物も多々あるが、愛用し続けるにはどれも微妙だ。

と言うか何処から仕入れてきたと問い詰めたくなるような物が幾つか混じっているんだが？誰だよガンダムシリーズの覆面系を集めたのは……

「こちらなどはどうですかヨイチ殿？海軍の英雄ガープ中将の帽子を模した物なのですが」

「パス。犬の姿に変身出来る俺が犬の帽子被ってどうするよ」

犬の帽子を被った犬……なんて微妙な。同様の理由から動物のかぶり物系は却下で。

「ん？コイツは……」

色々あさっていると何故かご丁寧に俺宛の手紙が出てきた。何故と思うが、こういった事が出来る知り合い？がいる事を思い出す。

自然としかめ面になるのが解るが、あいつからの手紙なら何か重要なことかも知れないので嫌々ながら封を解く。

『君に相応しく、おそらく君も気に入るであろう服装を部屋に用意しておいた。願わくばこの姿で活躍されんことを。By・神』

やはり貴様か。しかし俺に合う格好だと？まあ悪魔の実とかで世話になっているから一応見てみるか。

商人達へ礼をして自室へと急ぐ。そして部屋の中にそれはあった。裾の長いロングコート。ごつい靴。そして鷲をあしらった帽子。

「どう見ても大尉です。本当にありがとうございます」

確かに某最後の大隊のあの人は俺と同じ獣人だけどさ、だからといってこれはネタに走りすぎじゃないか？

「でもせっつかくだから着ておこう」

この世界に来るまではどっちかかって言うのと少佐の格好の方が似合ったから、ちよつとぐらい格好を付けてみたい。

靴とズボンを履き替え、コートを羽織って帽子を被る。それらは詭えたようにピッタリで、意外と着心地も悪くなかった。

何よりも軍服な為か自然と背筋が伸びるような気がする。俺はミリオタじゃ無いんだけどな。

「うーん、神の指示通りにするのは癪だが、シンボルも付いているからいつそこれで行こうかな？」

羽を広げた鷲のマーク。ドクロも入ってないし、制服も格好いい。

帽子を深く被って襟で口元を隠せば顔も隠せる。帽子とコートを脱げば俺が悪食とは思わんだろう。

「これ以上の物は思いつかんし、わざわざ神が用意してくれたんだ。使わせて貰うとするか」

鏡を前にポーズを決めていると普通の人間では立っていられないほど船が大きく揺れた。そして聞こえる大咆哮。

ただ事ではないと慌てて甲板まで駆け上がると、さっきまでいた貨物船にの向こう側に巨大な蛇のような姿が見えた。

「海王類!？」

サイズにもよるが、海王類は小型ですらそこらの海賊よりもタチの悪い相手だ。

原作では容易く倒されている海獣達ですら商船にとっては致命的。グランドライン産とはいえ海牛モームですら町一つ壊滅できるような怪物だ。それをろくな武装を施していない船で相手をしようというのだから無謀としか言いようがない。そう考えると小型船で海王類相手できるバトルフランキーはどれだけ高性能なんだか。

しかも何より最悪なのは海獣、海王類が相手では白旗すら意味がない事だ。海賊からしてみれば商人は金の卵を産む鶏だから、抵抗しなければ無駄に殺されることは少ない。だが海王類にとってはどんな卵を産もうが鶏は鶏でしかなく、等しく美味しく頂かれてしまう。更に面倒な点として連中は海中を移動するから事前に察知して対応

することが殆ど出来ない。この世界ではソナーなんて便利な物は存在しないからな。

おまけに賞金稼ぎからすれば金にならないから相手にするだけ損な相手だ。まあ俺にとってはこの上ないご馳走なのだが。

「遅いぞヨイチ！」

「すまん！！」

返事もそこそこに羽を広げて貨物船へと飛び立つが、向こうの方が早い。鎌首をもたげた海王類は甲板にいるクルーに襲いかかった。

「させん！『音壁』！！」

船との間に音の壁を滑り込ませる。とはいえ未熟な俺の音壁では数秒稼ぐのが精々。その間に甲板へと降り立ち更なる防御を施す。

「『髪^{ヘア}ネット』！つて、うおお！？」

無数の髪で網を作り出して海王類の突進を受けきつたまでは良かったが、足場が船のため船ごと押し込まれた。そのまま貨物船は横滑りしていき、横を航行していた客船へとぶつかりそうになる。

「くっ！！モデル『シープ』！！」

体毛の数を増やしてダイニングキッチンの範囲を限界まで広げ、客船への衝突を防ぎきる。流石にあのままの勢いでぶつかったら双方共に損傷していただろう。

ギリギリと尚も押し込んでくる海王類だが、流石にこのサイズの船二隻を押し込むのは無理と見たのか一旦海の中に引っ込もうとする。

「逃がすか！！『髪^{ヘア}ロツク』！！」

海の中に逃げ込まれてはこちらから攻撃できないので、船二隻分の浮力でもって頭を海上に固定した。もちろん海王類は暴れに暴れ、二隻の船も周囲の海も大揺れだが、此処で逃がして船底からのぶちかましでも食らおう物なら沈没確定だ。故に少し船が傷つこうとも此処で仕留めておく必要がある。

「おい、残りの三隻に大砲を撃ち込むように連絡しろ！狙いは頭だ！！」

「はっ、はいいー！！」

甲板に転がっているクルー達に命令を下す。

残念ながら俺は押さえ込むので精一杯だ。この巨体と力比べしながら毒の生成や音の砲撃をするのは無理がある。どつき合いなら容易く勝てる相手だが、流石に純粋な力比べで体重差が数十倍もあるとちとキツイ。

船が射線を確認するのに少々時間がかかったが、一隻、二隻、三隻と砲撃が始まる。

海王類といえどこれは堪った物ではないようで、瞳孔を縦に細め更に激しく暴れる。船上はまるでロデオのように跳ね上がり、固定されていない物が宙を舞う。客船の方は多少マシなようだがそれでも船内は大変なことになっているだろう。

だが海王類の最後のあがきも長くは続かなかつた。絶え間なく打ち込まれる砲撃に徐々に抵抗が少なくなっていく、遂にその動きを止めた。

「うおおおお　　！！」「やった、仕留めたぞ！！」「助かった！！」

砲撃が止み全ての船から勝ち鬨が聞こえるが、残念ながらもまだ海王類は生きている。死んだふりが出来るなんて初めて知ったが、ダイニングキッチンの中にいる以上丸わかりだ。

「ま、運がなかったと諦める。『一刀ボイスカッター』」

大暴れしていたさつきまでとは違い、今は他に力を回すだけの余裕があった為、海王類に向けて一言呟くとその首を斬りつけた。

突然の凶行に周囲の者が何事かと騒然となるが、海王類の断末魔でハッとなった。

「浮かれるのはきちっと仕留めてからにしろよ。動かなくなったからって死んだとは限らないんだからな」

海王類に遭遇するなんて滅多にないだろうが、一応今後のために釘を刺しておく。

「さあ、全員ポケットとしてないで仕事仕事。人員把握と被害確認急げよ。直接被害は抑えたが二次被害はあるんだからな」

手を叩いて意識を向けさせるとあわただしく走り出すクルー達。あれだけ激しく船が揺れたのだから海に投げ出された人間や転倒して怪我した人間がいるだろうし、積み込まれた荷も破損しているだろう。物品に関しては取り返しが付かないが、行方不明者の探索及び怪我人の治療は早いほうが良い。

「とはいえそれは雇い主達の仕事。俺はこっちに集中するか」

未だに髪ロックで固定している海王類を見上げる。さて、コイツは

どう料理しようかね？

やっぱり蛇みたいな見た目からして蒲焼きかな？取れたただから刺身は外せん。ああ、どんな味をしているのだろう。想像したただけでもヨダレが……

「おい誰かコック呼んできてくれないか？」

「コイツを捌くんですかヨイチ殿？」

「ああ。俺もある程度は捌くがコック達には仕上げを頼みたいんだよ」

へアロックを緩めて甲板へと頭を降ろす。うーん、コイツも海王類としては小物に分類されるんだろうが、それでも頭だけで甲板が一杯になるほどだ。

やれやれ、大型と呼ばれる連中は一体何時になったら食べられるかね？

「自分は海王類を食べるのは初めてです」

「まあ海王類なんてイーストブルーじゃ滅多に市場に出回らないらしいからな」

グランドラインなんかには海王類専門の漁師なんてのもいるらしいが、イーストブルーの漁師にそこまでの戦闘能力を求めるのも酷な話だ。そもそも普通なら海王類を狩れるだけの腕があれば海賊か海兵が賞金稼ぎになってるっての。

「ま、イーストブルーじゃ滅多に食べれんからみんなで食べようや。それに客船の乗客達にも迷惑かけたから振る舞ってやった方が良さだろう？このサイズなら全員で食っても余るだろ」

「解りました。各船のコック達に連絡を入れてきます！」

走り出したクルーを見送り、海王類へと向き直る。さて、まずはぶつ切りにしていきますか。では……

「全ての食材に感謝を込めて。いただきます」

7・トレードマークを手に入れた（後書き）

ゴールデンウィークなど無い！！

いきなりすいません、三鳴雷です。

不規則な仕事の自分には纏まった連休なんて無いのですよ。

愚痴は聞いてて気持ちの良い物じゃないでしょうから今回の内容について。

書いていていまいちキャラの姿を元に妄想が出来ないので、明確な姿形を与えるためにネタに走りました。獣人でインパクトのある格好というと、『大尉』ぐらいしか思い浮かばなかったんで与一くんに着せちゃいました。

ミリオタじゃないしナチス思想なんてロクに知らないけど、何故か旧ドイツの軍服って格好いいんですよね。ま、自分が着ても似合いやしませんけど。

ただ鉤十字って原作の方で問題になったんですよね。白ひげの元々の旗に卍が使われていたけどナチスを連想するから使っちゃダメとか。今の十字架よりも卍の方が好きだったんだけどな。

ま、二次創作まで文句付けてくる人いないだろうから自分は使いますけどね。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4378s/>

ONE PIECEを食い尽くせ！！

2011年5月7日03時20分発行